

九州菱肥会実務者研修会 in 福岡

節分を過ぎると暦の上では春となり、菅原道真公で有名な大宰府天満宮の梅も見頃となる。九州の肥料商にとっては春の繁忙期に差し掛かり慌ただしくなる頃だが、会員、賛助会員総勢20名の出席を頂き第36回九州菱肥会実務者研修会を2月23日～24日の2日間で盛会のうちに終えることができた。研修1日目は福岡市に隣接する糸島市のJA糸島産直市場「伊都菜彩」を見学。同市場は平成19年4月にオープンした比較的新しい農産物直売場だが、平成24年には年間35億円を叩き出し売上高日本一となった。テレビ番組『SmaSTATION!』でも特集されたほどで商品によっては午前中で品切れになるものも少なくない。売場面積は1,268㎡で平成26年3月現在の登録生産者数は1,492名、このうちの半数弱が毎日生産物を出品している。農産物の売上は全体の40%ほどで、他に鮮魚類が約20%、加工品、乳製品を含む畜産物が約20%となり、新鮮な農畜産物に加え海産物と商品のラインアップが豊富なことが伊都菜彩の強みである。

研修2日目は平成28年2月にオープンした福岡市中央卸売市場青果市場「ベジフルスタジアム」を見学。折角の機会なので7時からのセリを見学するためホテルを6時半に出発と眠い目を擦りながらの研修となった。

福岡市には青果物を扱う市場が3か所（旧青果市場、東部市場、西部市場）あったが、旧青果市場への一極集中化による東西市場の機能低下、旧青果市場の老朽化などの課題があり、3市場を統合し新たに巨大青果市場ベジフルスタジアムを建設した。総工費は約400億円、敷地面積は15万㎡とヤフオクドームの2倍以上の広さを誇り、1日当たり平均1,200ト、年間で約32万トン、400～500種の青果物を取り扱っている。日本全国の主な市場の卸売場全体における低温（定温）売場の割合が20%にも届いていないことに対して、ベジフルスタジアムは84.4%もの高い割合で日本最大規模の定温卸売場を整備している。食品の安全面にも細心の注意を払っていて、市場を流通する食品の農薬や防カビ剤などの残留、0-157などの食中毒細菌など食品衛生法の基準に適合しているかを抜き取りチェックしている。福岡市独自の取り組みとしては、通常は市場に出荷されたものを検査対象としているが、およそ10日後に出荷を予定している作物を畑に

(次ページへ続く)



2日目の昼食は福岡市で唯一の造り酒屋「百年蔵」にて

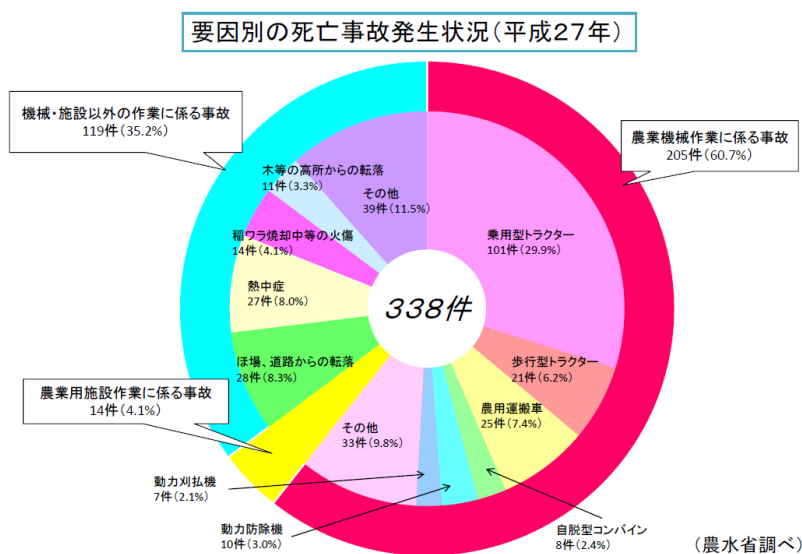
(前ページより続く)

ある段階で残留農薬の検査をしている。また、農薬取締役法での適用外農薬使用を未然に防ぐため、例えば似ている野菜でも水菜には使用できるが小松菜には使用できない農薬などの情報提供を積極的に行っている。ベジフルスタジアムは専用の見学通路があり、せりを行っている時間帯はもちろんのこと開場時間帯であれば常に見学が可能となっている。消費者がせりから食品衛生検査まで一貫して見学できるのも安全・安心が叫ばれる消費者の要望に対応した最新の青果市場と言えるだろう。(福岡支店)

農業作業中の死亡事故について

～65歳以上の高齢者が大半 乗用型トラクター事故で多発

昨年の農作業時に発生した死亡事故が公表された。暦年合計で338名の方が命を落としている。ここ10年間の農作業中における死亡事故は平成21年の408名をピークに減少傾向となっており改善の兆しが見えるものの65歳以上の高齢者による死亡事故は284名と全体の84%と高い傾向にあり、昨今の高齢者による事故発生率は高いままとまっている。昨今では自動車運転で70歳以上のドライバーでの事故率が高く問題視されており運転免許の自主返納が話題となっているが、そもそも農業従事者の平均年齢は65歳を超えているためこの年齢層以上の方における事故発生件数が高いのは致し方ないところ。農作業における死亡事故のうち農業機械作業に係る「機械事故」は205件と圧倒的に多くなっている。そのうち乗用型トラクターによる事故は101件とほぼ半分の高い率となっており、その中で機械の転落・転倒が72件となっており畦畔や農道から逸脱した無理な運転のケースが多い。農業機械作業以外に発生件数の多い死亡事故としては、自身が圃場や道路からの転落や剪定時の樹木等高所からの転落、稲わら等を焼却中による巻きぞい、屋内外作業時での熱中症によるものが挙げられている。また、農業用施設作業に係る事故としては作業舎・屋根等の高所からの転落があり、これも命綱等を装着していないままの高所での作業を軽んじた初歩的なミスが重大事故につながるケースとなってしまう。稀な事故としては落雷や農薬による中毒も昨年は発生している。また、海外ではよく聞く話だが、蛇や昆虫による死亡事故も5件発生している。確かに海外にて農作業を行う場合、障害保険申請時には保険対象扱いとはならず断られるケースもあるので農作業は危険だらけということだ。死亡事故発生件数の多い月は5月や7月、9月や10月と田植えや収穫時期が集中する季節となっている。今年も春の農作業シーズンを迎えるが、業界に携わるものとしては大切なお客様にはこのような不慮の事故に遭ってまいたくはない。話のネタとしても価値あるものでもあるため皆で啓発していきましょう！



また、農業用施設作業に係る事故としては作業舎・屋根等の高所からの転落があり、これも命綱等を装着していないままの高所での作業を軽んじた初歩的なミスが重大事故につながるケースとなってしまう。稀な事故としては落雷や農薬による中毒も昨年は発生している。また、海外ではよく聞く話だが、蛇や昆虫による死亡事故も5件発生している。確かに海外にて農作業を行う場合、障害保険申請時には保険対象扱いとはならず断られるケースもあるので農作業は危険だらけということだ。死亡事故発生件数の多い月は5月や7月、9月や10月と田植えや収穫時期が集中する季節となっている。今年も春の農作業シーズンを迎えるが、業界に携わるものとしては大切なお客様にはこのような不慮の事故に遭ってまいたくはない。話のネタとしても価値あるものでもあるため皆で啓発していきましょう！

東日本大震災から6年になります。時間の経過と共に少しずつ記憶が風化していってしまう中、防災・減災を見直すのが3/11です。皆さんの備えは大丈夫ですか？

編集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL http://www.mcagri.jp